

図書館情報学教育における遠隔教育

Heide Julien, Jane Robbins, Elisabeth Logan, Prudence Dalrymple

Julien, Heidi ; Robbins, Jane ; Logan, Elisabeth ; Dalrymple, Prudence.
KALIPER Project: Final Report - Going the Distance: Distance Education in Library and Information Science Education.
Journal of education for library and information science. Vol.42, No.3, p.200-205(2001)

ケロッグ財団 と米国図書館情報学教育協会 ALISE の Information Professions and Education Renewal プロジェクトとの共同作業である KALIPER プロジェクトの目的は、質問紙調査、事例研究、内容分析、インタビューなどの手段によって、図書館情報学教育のカリキュラムの主要な変化の性質と程度を分析することであった。図書館情報学のプログラム 26 件の大まかな分析から更にいくつかの領域を選び、詳細に検討した。このためにアーカイブ、学校メディアと並んで遠隔教育を選んだ。

KALIPER プロジェクトは、1923 年に画期的な Williamson Report が発表されてから 70 年以上が経過した 1990 年半ばから後半にかけての図書館情報学カリキュラムの状況を報告している。この 75 年間にわたって図書館情報学教育の共通基準は、米国図書館協会 (American Libraries Association (ALA)) の発表した認可基準であり、北米の図書館学のほとんどは、ALA 基準に適合したプログラムによって教育されてきた。ALA の基準は 1925 年、1933 年、1951 年、1972 年、1992 年に制定・承認・実施されている。

1992 年版の認定基準 (Standards for Accreditation) には、図書館情報学の範囲を広くとっていること (司書職に限定されない)、規範的要求条件を含まないこと、継続評価を重視していること、多様なプログラムに適応可能であることなどの注目すべき特色がある。さらに遠隔教育に関してはいくつかの個別的な基準が存在する。一般的なアプローチは序文と跋文に明記されている。

この標準の要求条件はプログラムの形態や実施場所に関わりなく適用される¹⁾。この標準は、プログラムまたはその構成部分の提供場所や提供方法 (たとえば衛星、有線テレビ) は、認定に際してプログラム全体の単なる一側面として考慮されることを明らかにしており、遠隔教育に対して特に推奨あるいは警戒の態度をとるものではない。認定のためにはすべてのプログラムはその提供場所や形態に

関わらず同様に審査される²⁾

この標準に基づく最初の審査は1994年に行われ、対象プログラムの中には既に遠隔教育を実施していたものも含まれていた。したがって KALIPER プロジェクトに参加した研究者が図書館情報学教育プログラムを検討するにあたって、遠隔教育を一つの側面として取り上げたことに不思議はない。

文献展望

遠隔教育への関心は図書館情報学文献にも反映しており、他分野での動向と並行している³⁾。1996年に発行された Journal of the American Association for Information Science の特集号で Daniel Barron は図書館情報学における遠隔教育の歴史を展望し、キャンパスでの勉学が不可能な学生に教育機会を提供することで公平性に寄与するという観点から典型的な支持論を展開している⁴⁾。またこの特集号では遠隔教育に関連して特に考察を必要とする問題点を分析するための枠組みをも暗示している。それらの問題点とは、インフラストラクチャーと資源の複雑さ、教育学的問題、運営のための人材の増強、図書館などの情報資源に対する学生の遠距離アクセスを保証する必要、組織や方針の異なる各種機関と遠隔教育の調整の困難、学生の動機づけの問題などである⁵⁾。

同じ特集号から、遠隔教育の構造を理解するための別の枠組みをも見て取ることができる⁶⁾。Sutton は遠隔教育の広がり論じている。一つの極端は非同期・非対称（教員と学生とのコミュニケーションに関して）であり、学生間のコミュニケーションはなく、遠隔授業の形態は単一である。他方の極端は Sutton の理想とするところであって、同期的、すなわち教員と学生が対称的にコミュニケーションするとともに、学生間のコミュニケーションも同時に行われ、授業は複数の形態で行われる。Sutton は十分な資源を学生に提供することの複雑さにも触れているが、これは遠隔教育が「理想的」形態に近づくにつれて困難の度を増す問題である。

特集号の別の記事では教育学が焦点となっている⁷⁾。Linn は遠隔教育の効率性を高める教授法として特に足場かけ (scaffolding) を論じている。この方法では享受者が、課程の目標が到達可能なものであること、思考が可視化されること、学生の自律性が奨励され支援されること、社会的ないし同位者間学習の利益が認識されることを保証しなければならない。ALISE は図書館情報学の遠隔教育に関するこのような記述的・理論的論文の出版だけでなく、基本的な統計調査を行い毎年の結果を報告している⁸⁾。

遠隔教育は教育研究の分野で注目を集めている。最近のメタ分析の結論によれ

ば、遠隔教育に関する研究の質は総じて高くない⁹⁾。この結果は、学生の満足度や成績の点で遠隔教育が優れているとされる一般の評価を疑問視するものである。著者らは多くの研究結果から、「学習課題、学習者の特性と動機づけ、教授者」などの要因、すなわち教育学的要因が特に重要であり¹⁰⁾、しばしば目を奪われがちな教授技術よりもまずこれらを問題にしなければならない。この問題は、遠隔教育に対する学生の満足度の予測指標の発見を目指した最近の研究でも指摘されており¹¹⁾、教育学的問題が最も重要であることが見出された。図書館情報学に関する最近の研究も教育学の重要性を明らかにしている¹²⁾。したがって、この研究の成果は遠隔教育の動向の記述という点では価値あるものではあるが、今後さらに遠隔教育推進の成果、特に効果的な学習のための教育的アプローチに関する研究を進めることが必要である。

遠隔教育に対する見方はこのように様々であるが、学生にとって柔軟性が高いことは利点の一つとして一般に認められている。米国には49、カナダには7つの遠隔教育プログラムがあるが、米国の州の約半数、カナダの5つの地方には存在しない。分布がこのように不均一であるため、雇用や家庭の事情などで移住が不可能な多くの学生に教育機会を提供する必要上、図書館情報学にとっても遠隔教育は極めて重要である。

KALIPER プロジェクトの研究によってもこの印象は裏づけられる。最初の学部長および理事に対する質問紙調査(56校に送付し回答率は84%であった)、26校についての詳細な事例研究(KALIPER 研究チームにより実施)に基づいて、Pettigrew & Durrance は次のように述べている。

課程の期間、授業の日時や場所について、今日の学生は従来よりもはるかに広い選択の自由を持っている。たとえばノーステキサス大学の授業は全州の各地で受講できる。インターネットによる遠隔授業(短期間の学内学習が義務づけられている場合もある)はますます普通になっている。イリノイ大学のLEEP(Library Education Experimental Program, Web ベースの遠隔教育プログラム)およびFriday Only プログラムは数年来多様化した授業形態のモデルと見なされており、LEEP3 プログラムは学内の受講生にも影響を及ぼし、教室の空いている時間に受講できるようになった。ドレクセル大学では修士課程全体をインターネットで提供しており、州立サンノゼ大学は課程の一部を学内で授業し、一部を遠隔授業する混合モデルに従っている。ミズーリ大学も授業形態の変化が今後大きく変化すると予想している。その他の新しい授業形態としては、他大学の課程を修了して単位に算入できるような大学間提携があり、外国の大学との協力も行われている。

KALIPER のチームによる研究には、プロジェクトの性質自体から来る制約があった。研究への参加は自由意志により、最初の調査は参加の意思を表明した大学のみを対象としており、対象校はいくつかの研究チームに割り当てられた。すなわち調査対象は自主参加校に限られ、詳細な分析は特定の研究チームに割り当てられた大学のみについてなされたわけである。しかし対象となった7校は公立校・私立校、博士課程とそれ以下の課程を共に含み、所在地の点でも都市部と農村部に分かれるなど多様性に富んでおり、したがって革新性、規模、遠隔教育の歴史などの点で有名でない大学をも含んだ一断面を考察することができた。

この7校について、それらのプログラムにおける遠隔教育の経験や、授業形態の多様化の程度に関する予想を知るための詳細な検討を行った。この事例研究により、過去3年間における授業形態の変化はそれほど著しいものではなく、また今後3年間にも大きな変化は予想されないことがわかった。これらの結果を表1に示す。

表1 過去および将来の授業形態の変化に関する学部長・理事による自己評価

大学名	過去3年間	今後3年間
ルイジアナ州立大学	5	3
シモンズ・カレッジ	1	2
メリーランド大学	3	3
ウィスコンシン・マディソン大学	3	3
サウスフロリダ大学	4	4-5
クイーンズ・カレッジ	2	2
テネシー大学ノックスヴィル校	3	4

注：1 = なし，2 = 小，3 = 中，4 = 大，5 = 根本的变化

上記7校での遠隔教育の現状を更に深く知るため、遠隔教育に絞った下記の質問から成る簡単な追加アンケートを行った。

1. 校外（遠隔）学習課程を提供していますか。
2. そのような課程の数はいくつですか。
3. そのような課程ではどのような主題または技能を取り上げていますか。
4. それらの課程への昨年および過去3年間の登録学生数は何人でしたか。
5. その数字は登録学生総数の何%に相当しますか。
6. それらの課程は完結したクラスですか、あるいは更に大きなプログラム（一連のクラスを修了することで学位または修了証書が授与される）の一部として提供されていますか。

7. それらの課程をどのような形態（ビデオ，ITV，見学，Web など）で提供していますか。
8. 遠隔教育クラスまたはプログラムの履修者に対して何らかの形の学内授業への出席を義務づけていますか。
9. 遠隔教育または分散授業クラスを何年前から設置していますか。
10. クラスまたは対象者の重点は過去3年間に変化しましたか。
11. 遠隔教育課程の開発や実施は，永任権のある，ないし永任権取得の可能性のある常勤教員が行っていますか。そうでない場合，担当教員はどのような組み合わせですか。

以上のほか，回答を補足するのに必要と思われるコメントを記入するように求めた。

結果

大部分の大学（7校中5校）は何らかの形で遠隔教育を実施しており，学外授業を行っていないと回答したのはシモンズ・カレッジとメリーランド大学のみであった。課程の数には大きな幅があり，ルイジアナ州立大学の各学期1～3課程からウィスコンシン・マディソン大学の1998～99年の23課程にまでわたっている。同様に課程の主題範囲（技能・知識分野）も多様であり，学外課程を設けている大学のほとんどは全分野を提供している。1校（ウィスコンシン・マディソン大）は遠隔教育を単位と無関係な成人教育コースに限定しているが，他の4校では修士号や学校司書資格が取得できる課程を開設している。登録学生数のうち遠隔学習者の比率は多くは50%以下であるが，サウスフロリダ大学では52.3%に達しており，過去4年間を通じて増加を続けてきた。

上記5校での遠隔教育の授業形態は様々で，旧来の印刷物とカセットテープによるものから，対話型ビデオやWebにまで及んでいる。また5校中3校では遠隔地における授業も実施している。学内授業への出席はクイーンズ・カレッジを除いて義務とはなっていないようであるが，テネシー大学ノックスヴィル校では2000年秋以降は学内でのオリエンテーションと最終試験への参加を義務づける予定である。オリエンテーションは第1学期の授業の開始前に1週間行われる。授業形態は主としてインターネットであるが，授業内容によっては異なる場合もある。課程は3年間で学位を取得できるように組織されているが，学生はノックスヴィル校で論文に対する試問または総合試験を受けなければならない。遠隔教育を行っている大学の大部分では課程のほとんどを常勤教員が担当しているが，非常勤教員もある程度加わっている。

以上の結果によって、およそ半数の大学での遠隔教育の範囲、形態、量についてかなりの知見が得られたが、研究チーム2は更に ALA 認定プログラムにおける遠隔教育の全体像を把握するため、56校すべての学部長・理事に短い追加アンケートを送付することにした。この調査は下記の4つのシナリオのうち、1996年(調査時点の5年前)、1999年、および2000年(予想)において実情に最もよくあてはまるものを選択するように求めたものである。

- A. 修士課程の授業全体を、教員と学生が同じ教室(メインキャンパスに限らず)に入る対面式授業とする。公開講座や協同プログラムなどでの校外の対面式授業もここに含める。
- B. 修士課程の授業に何らかの技術を介在させ、教員と学生が空間的または時間的に隔たっている。課程の一部または全部において構内授業出席が義務づけられていても、修士課程全体を技術的手段で提供している場合はこの範疇に入る。重点は遠隔教育を通じて修士号を取得できることである。
- C. 対面式授業を主とするが、一部の授業を校外で行う。学位を取得するには課程の一部を学内授業で履修しなければならない。
- D. 技術的手段を介在させた授業を課程の一部について行う。学生はプログラムの少なくとも一部を学内で受講しなければならない。

回答率は93%(n = 52)であった。結果を表2に示す。

表2 各大学の状況に最も近いシナリオ

	1996(%)	1999(%)	2002(%)
シナリオ A	47	29	7
シナリオ B	15	27	10
シナリオ C	21	13	29
シナリオ D	7	25	46

1996年には大部分の大学が、メインキャンパスでも校外でも対面授業を行っていたが、1999年には状況は変化してシナリオ A, B, D がほぼ拮抗しており、全体的に遠隔教育の比重が増していることがわかる。2002年については多くの大学がシナリオ D への接近を予想しており、対面授業も校外の比重が大きくなる。また技術的手段の介在する課程(すなわち遠隔教育)によって学位が取得できるシナリオ B の採用も増加する傾向にあるようである。

考察および結論

遠隔教育は図書館情報学教育の重要な一成分となりつつあり，本研究によれば，技術的手段の介在する遠距離教育は今後とも図書館情報学教育において重要な役割を果たすと考えられる。しかしながら，遠隔教育の実施形態の多様性とは別に，すべての学生に質の高い学習経験を与えるために重要な課題が残っている。技術やそれによる教授方法は急速に変化するものであり，図書館情報学教育に携わる者はそれに歩調を合わせて教育の方法論を開発しなければならない。さらに図書館情報学における遠隔教育の成果を最大化するために，最適の教授法に関する詳細な研究を緊急に行う必要がある。教育の成果は Sutton のモデルの全体にわたって均一であろうか (14)。この問には，他の分野と同様，図書館情報学においても十分な答が出ていない。教育学的選択は，図書館情報学の学生に対する成果の十分な認識に基づいて合理的になされなければならないし，それだけの価値がある。

引用文献

1. *Standards for Accreditation of Master's Programs in Library & Information Studies* (Chicago: ALA, 1992), 3.
2. Ibid., 24.
3. Donald G. Hackmann and James E. Berry, "Distance Learning in Educational Administration Doctoral Programs: The wave of the Future?" *Journal of School Leadership* 9, no. 4 (July 1999): 349-67; Peter St. Pierre, "Distance Learning in Physical Education," *Quest* 50, no. 4 (Nov. 1998): 344-56; Bruce A. Thyer et al., "Evaluating Distance Learning in Social Work Education: A Replication Study," *Journal of Social Work Education* 34, no. 2 (spring-summer 1998): 291-95; and Katherine S. Mangan, "Top Business schools Seek to Ride a Bull Market in On- Line M.B.A.'s," *Chronicle of Higher Education* 45, no. 19 (Jan. 15, 1999): A27-28.
4. Daniel D. Barron, "Distance Education in North American Library and Information science Education: Applications of Technology and Commitment," *Journal of the American Society for Information Science* 47, no.11 (1996): 805-10
5. Howard Besser, "Issues and Challenges for the Distance Independent Environment," *Journal of the American Society for Information Science* 47, no. 11 (1996): 817-20
6. Stuart A. Sutton, "Planning for the Twenty-First Century: The California state university," *Journal of the American Society for Information Science* 47, no. 11 (1996): 821-25.

7. Marcia Linn, "Cognition and Distance Learning," *Journal of the American Society for Information Science* 47, no.11 (1996): 826-42
8. Evelyn H. Daniel and ferry D. Saye, eds., *ALJSE Library and Information Educational Statistical Report* 1999. (Arlington, Va.: ALISE, 1999).
9. Jamie P. Merisotis and Ronald A. Phipps, "what's the Difference?" *Change* 31, no. 3 (May/June 1999): 12-17.
10. Ibid., 15.
11. Gregory A. Debourgh, "Technology is the Tool, Teaching is the Task: Student Satisfaction in Distance Learning," In *SITE 99: Society for Information Technology & Teacher Educational International Conference* (10th annual, Sam Antonio, Tex., Feb. 28-Mar. 4, 1999).
12. D. Oberg and I. Henri, "Changing concerns in Distance Education for Teacher-Librarianship," *Education for Information* 17, no. 1 (Mar. 1999): 21-33.
13. Karen E. Pettigrew and Joan C. Durrance, "KALIPER Study Identifies Trends in Library and Information Science Education," *The Bowker Annual*, 45th ed. Dave Bogart and Julia C. Blixrud, eds. (New Providence, N.J.: R. R. Bowker, 2000), 215.
14. Sutton, "Planning for the Twenty-First Century"

